

氏名	岡 益 巳
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	学 術
学位授与番号	博乙第3049号
学位授与の日付	平成8年 9月30日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)
学位論文題目	現代中国と流行り謡 ——開放政策がもたらした社会の歪み——
論文審査委員	教授 松本俊郎 教授 石田 米子 助教授 佐藤 智水 教授 下野 克巳 大阪外国語大学教授 大河内 康憲 大阪外国語大学教授 西村 成雄

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

岡益巳氏が提出した『現代中国と流行り謡——開放政策がもたらした社会のゆがみ——』は、600篇余の「流行り歌」（順口溜）を題材に現代中国社会の実状をリアルに描写した論文である。文学、民族学、社会学、歴史学といった多様な学問領域にまたがる学際的な研究であり、文化科学研究科の学位である Phd. in Humanities の審査対象となるにふさわしい性格を持っている。

序章「課題と意義」では「流行り歌」といわれるものを検討することの意義と先行研究の到達状況が述べられる。岡氏によれば、「戯れ歌」である「流行り歌」には文学的な価値が乏しく、これまで文学者からはほとんど顧みられてこなかった。しかし、「流行り歌」には、より広く人文社会科学の視点から見直してみると、大きな価値が生まれてくる。なぜなら言論の自由に制約があり、また識字率が十分でない条件のもとにおいては、民衆の社会に対する本音の評価が「流行り歌」や「小話」に託されて表出されることになるからである。すなわち岡氏が着目した中国の「流行り歌」は、1950年代末期の「新民歌運動」の過程で生み出されたような大政翼賛的なそれではなく、体制に対する民衆の批判、不満が込められた1980年代以降のそれである。

反体制的な「流行り歌」は、その性格ゆえに毛沢東政権下では厳しく取り締まられてきた。そして改革・開放体制へ移行してからは、それなりに政治的な自由が拡大されたことにもなって、急速に社会に拡がってきた。香港で出版される雑誌や書籍ではそうした「流行り歌」の流布の状況が、1980年代半ばからしばしば海外に対しても紹介されてきた。

しかしながら、実証性を重んじる社会学、歴史学等の分野においては、特定の時期に口ずさまれ消滅していく「流行り歌」は、その記録性の乏しさゆえに学問的な検討対象とならなかった。「流行り歌」を収集した資料集は1980年代後半に台湾で1冊（2巻、400篇弱）刊行され、中国では1994年に1冊（300余篇）が出版された。その後も中国文聯等による組織的な採集活動が試みられている。しかし、現代の「流行り歌」が持っている改革・開放路線を批判し、鄧小平政権を皮肉るという性格もあって、中国国内では収集作業の域を越える本格的な研究は、いずれの分野においても進展せず、台湾においても研究といえる成果は生まれていない。

岡氏の論文は、以上に述べてきたような様々な事情から学問研究の対象としては取り上げられてこなかった現代中国の「流行り歌」を先駆的に取り上げて、鄧小平体制が押し進めてきた改革・開放路線の実態を生き活きと論じた斬新な学術成果である。収録された「流行り歌」も従来になく多数であり、資料集としても高い価値を持っている。

岡氏の研究は1985年に始まった。『人民文学』誌上に掲載された文学作品の中に現代中国社会の世相と問題点を見いだして、いわゆる「四つの近代化」の実態を探り始めた。

「流行り歌」に対象を絞り込んで分析がさらに掘り下げられたのは、1988年以降のことであった。およそ10年で「流行り歌」研究は体系的にまとめられたことになる。

このように岡氏の研究は、まずもって、着眼点のユニークさと精力的な努力に見るべきものがある。

第1章「社会全体の風潮」では、国民総拝金主義といわれる中国社会の現状が提示される。「金銭不是万能的、没有金銭万万不能的」（カネは万能じゃないけれど、カネがなければ万事休す）、「十億人民九億商、還有一億待開張」（十億の人民の九億が商売、その上一億は開店準備中）といった「流行り歌」が、それを示す具体的な材料である。

第2章「役人の実態」と第3章「エスカレートする役人の腐敗現象」では、役人の公費による飲み食いや、職権をかさにきた彼等の不正を怒る「流行り歌」が紹介される。

「八点上班九点到、一杯茶水一張報、翻翻文献到午后、吃了中飯馬后炮」（八時の始業に九時出勤、お茶を飲んだり新聞見たり、書類めくっていると午後になり、昼食食って将棋で遊ぶ）。

「外国有个加拿大、中国有个大家拿、拿来拿去拿大家」（外国にはカナダがある、中国には「みんなで取る」風潮がある、取り放題でみんなから取る）。

「大宴三六九、小宴天天有」（大きな宴会は三日ごと、小さな宴会は毎日だ）。

第4章「共産党中央への批判」では動揺を繰り返してきた中国共産党の政策、そして社会主義そのものに対する批判と不信が皮肉を込めて歌われている状況が示される。

「你們說不過我們、我們打不過你們」（アンタたちはボクたちを説き伏せられない、ボクたちはアンタたちを打ちまかせられない）。

「一放就乱、一乱就収、一収就死」（政策を緩めれば乱れ、乱れれば引き締めるが、引き締めれば経済は停滞してしまう）。

「共産党的政策像月亮、初一十五不一樣」（共産党の政策はお月様のように、一日と十五日じゃ形が違う）。

第5章「腐敗の拡大と社会的不安の高まり」ではマスコミ界や国有企業の実態、治安の悪化、性的モラルの退廃といった社会全体に拡がる腐敗と社会不安が紹介される。

「人民日報、胡說八道；光明日報、并不光明；北京日報、胡篇乱造；中央電台、顛到黑白」（人民日報、でたらめばかり；光明日報、公明でない；北京日報、うそっぱちばかり；中央放送局、真偽を転倒）。

「書記談理想、廠長望下鄉、工人白相相、干活靠阿鄉」（書記様は理想を語り、工場長は田舎へ行きたがり、工員は遊んでばかり、仕事は出稼ぎ農民に頼っている）。

第6章「その他の社会現象」では教育研究の荒廃問題を中心に、一人っ子政策、インフレ問題、環境問題、偽商品の氾濫といった多様な問題が扱われる。

「教書不如売書、学者不如殺猪；手術刀不如剃頭刀、鑽業務不如開面鋪」（教員よりも本屋の方がまし、学者よりも肉屋の方がまし；外科医よりも散髪屋の方がまし、学問を研鑽するよりウドン屋開く方がましだ）。

終章「まとめにかえて」では40数年を経過した社会主義政権下の政治腐敗の歴史が簡潔に紹介される。そして、改革・開放の体制になってからは腐敗の度合いが深刻化する中で民衆の怒りがあきらめへと変化しつつあること、共産党中央が民心の離反に危機感を抱いて汚職の取締を強化しつつあること、にもかかわらず贈賄やコネ利用は蔓延し、政治的自由は依然として制限されていること等が指摘され、それゆえ「流行り歌」は今後もすたれないであろうとの岡氏の展望が語られる。

紹介された数々の「流行り歌」の中で取り上げられた中国社会の腐敗現象の多くは、チャイナ・ウォッチャーの間ではすでに知られていることである。しかし、改革・開放路線に対する民衆の怒りと皮肉と諦観とがむき出しになって表現されている「流行り歌」の紹介とそれに対する解説は、従来の中国研究にはみられなかった、中国社会に対するリアルな描写となっている。本研究の学界に対する最大の貢献は、なによりもこの点にある。

論文審査結果の要旨

一般に外国の文学作品は社会科学の文献よりも翻訳が難しい。中国文の場合も然りである。慣用的な字句表現の前後の字順を入れ替えたり、同音の別字を利用したりと多用な技法を駆使する中国人の漢字表現の巧みさを読みこなして日本文に書き改めるためには、独特の工夫が要る。「流行り歌」の場合には押韻、対句、掛詞、比喩、繰り返し、対比表現、数字表現、語呂合わせといった手法が、基本的な技法として用いられる。一般辞書には収録されていない日常的な言い回しや、伝統的な格言あるいは共産党（毛沢東、鄧小平）に対する賛歌をもじった表現がしばしば使われる点も、「流行り歌」の大きな特徴である。したがって、「流行り歌の」の簡潔な字句表現の中に凝縮された一般庶民の生活観や感情を拾い出し、それを社会背景と関連づけて解釈するためには、中国語学、中国文学、中国社会についての幅広い素養が必要とされてくる。

さらにいえば、民衆の口伝えで拡がっていく「流行り歌」には、伝播の過程でさまざまなヴァージョンがつけ加わる。記録性の乏しさとは対照的に「流行り歌」には変形性と多様性があり、微妙に異なる表現の相互の関連の中に独自の意味が付与される場合もある。収集された「流行り歌」の分量と広がりとは分析の掘り下げの程度に、はっきりと反映されてしまう。岡氏は香港、中国で出版された雑誌、書籍を渉猟して、採録が難しい「流行り歌」を精力的に収集した。この点に関わって審査員の間からは、「流行り歌」を現地で直接採集することの大切さが指摘された。情報源のかたよりは「流行り歌」のテーマのかたよりにつながる可能性があるからである。本研究の中で利用された諸々の文献資料を現地調査によって検証するためには多大な労力が必要とされるであろうが、「流行り歌」の体制批判的な性格や伝播のあり方からして、現地での収集活動はやはり今後に残された一つの重要な課題である。

このように分析対象としての「流行り歌」には、固有の取り扱い難さがある。しかしながら、岡氏の中国文の翻訳と解釈は、原文が持っている社会批判の内容を的確に伝えており、また考察が深いという点でも、各審査員から高い評価を得た。絶妙の翻訳文も随所に収められている。「不説白不説、説了也白説、白説還得説」（言わなきゃ損、言っても無駄、それでもやっぱり言わなくっちゃ！）などは、そうした名訳の一例である。

審査の過程では、いくつかの問題点が指摘された。第1の問題は中国社会に対する岡氏

の批判的な視点がすべて西洋的な価値基準に立脚していることへの配慮という問題である。具体的には中国社会における人権や民主主義の実態をどのように評価するのかということに関わってくる。現代中国社会は、社会主義や現代資本主義の価値観によって影響を受け、時には積極的にそれらを受け入れてきた。鄧小平政権もこの点で例外ではない。しかし他方では、中国社会は権力の側も民衆の側も伝統的な社会観や国家観に「呪縛」され、局面によってはどちらもそれらを意図的に利用している。現代中国人にとって生活規範ともなっているこうした中国古来の価値観の内容と機能を明らかにしようとする分析、すなわち中国社会の固有の論理に内在的な分析の枠組みを、本論文で用いられた西欧的視点とは別に、独自に意識的に追究することの必要性が指摘された。

第2の問題は「流行り歌」を社会科学として分析することの限界に対する配慮という問題である。「流行り歌」を通して中国社会の実態を把握することは、現状をリアルに理解するうえできわめて有用である。しかし、人権意識や民主主義といった社会科学の重要問題に対する分析を「流行り歌」の分析によって追究することには、もとよりある種の限界がともなわざるをえない。社会科学としての中国社会の分析には、その構造と機能を析出するための分析用具、概念設定が独自に求められてくる。この点において岡氏の研究は禁欲的に過ぎるという批判が出された。

第3の問題は「流行り歌」という分野が中国文学の中に占める位置をより明確にし、小説あるいは他の文化ジャンルにおいて行われてきた中国社会に対する批判との異同を文学論として掘り下げてほしいという要望である。この指摘は、文学論としての分析よりも現代中国社会そのものに対する分析として研究を追及してきた岡氏にとっていささか酷なものであったが、問題の所在と課題の重要性は審査会での共通認識となった。

審査の過程で提出されたこれらの要望は、従来手つかずであった学際的な領域から中国社会に対する分析を試みた岡氏の開拓者としての研究が、ある意味では不可避免的にともなうことになった弱点に対するものである。審査会では今後、諸分野の学術成果との相互交流を具体的に進める中で指摘された諸問題の克服をはかってほしいとの期待が、審査員一同から表明された。最後に、審査の総合的な結論として、提出論文『現代中国と流行り謡——開放政策がもたらした社会のゆがみ——』を博士論文として認定するという合意がなされた。